えんがわ

2019 年 10 月 1 日発行
出雲市古志町 344
社会福祉法人ことぶき福祉会
『笑庵ことぶき』
発行責任者：施設長　加田　誠
TEL:(0853)25-7701
FAX:(0853)25-7702
Mail:shouan@carol.ocn.ne.jp

ある言葉が私の中にあり、考えさせられています。

「職業としての介護」は誰にでも出来るものではない、という言葉です。資格が求められている職業内容ではあるのですが、資格の有無以前に、人間性の大切さや重みを問われているように感じます。介護を必要とされる方への尊厳のある生活を維持し、病や障がいを持って向き合っておられる心情にも配慮し、心配りのある介護が必要なのではないでしょうか。そこに資格も必要となってくるのですが、過去に高齢者に残忍な事件を起こした犯人が有資格者であったということも記憶に新しいです。

「資格」は人の上に立つ武器ではありません。持ち方、使い方を誤ると、人間性をも失ってしまうものになってしまいます。私達は福祉従事者として、人権を守るべき立場だと思います。資格を持つことはとても大切で必要な事だと思いますが、たとえ今は資格が無くとも、福祉の歴史を知りながら、自らお年寄りとの関わりを持って従事していく事は、資格を有する事以上に人間的に向上していけるのではないでしょうか。

ことぶき福祉会のケアテーマに「障がいをもっても人は人間らしく笑顔で暮らす権利がある」とあります。このテーマを今一度再認識し、利用者さんが安心して暮らしていける生活を支えたいと思います。

渡邊久美子

「誰もが幸せな高齢社会を求めて」（あけび書房出版）
第一章「社会福祉の原点と地域密着の意義」を読んで

社会福祉の原点を見ていくと、全て民間の施設から始まりそれが少しずつ地域に広まり国の制度にまで発展していったというのはとても興味深かったです。その中で、小規模施設についての話で思い出したことがあります。

20 年以上前になりますが、祖母を在宅で介護していました。その時は訪問ヘルパーを利用しながら家族で何とかみていましたが、そのうち祖母の状態が悪化し同時に母親の具合も悪くなり、祖母はやむを得ず老人保健施設に入所しました。

この当時はまだ小規模な施設で介護を行うという考え方もあまり普及しておらず、ケアマネージャーの提案の通りにすればいいのだと漠然と思っていました。いざ入所して面会に行くと、大勢の中で車いすに乗せられ、他のお年寄りと同じことをしてつまらなそうにしている祖母の姿を見て心が痛くなりました。職員によっては口調が荒かったり、冷たいような声がけの人もいて、元々教師として働きプライドの高かった祖母にとっては納得のできるものではなかったと思います。今思うと、お年寄りの状態や家族の状況から、長期や短期の入所だったりデイサービスだったり、必要に応じたケアができる小規模多機能の施設をきちんと知っていれば、約 1 年近く入所していた祖母の残り少なかった最後の人生も、心穏やかに過ごすことができたのではないか。私達家族も悔いが残らないように、世話をしたり看取ることができたのではないかと思いました。（ただ残念ながら小規模多機能施設は当時は制度化されていなく、出雲市ではことぶき園でしか実践されていませんでした。）

それから何年か経ち私も介護の勉強をし、小規模多機能の施設は 2006 年になって制度化されたことを知りました。

今となっては当たり前のように小規模多機能という言葉を使いますが、それを最初につくり運営していくというのは並大抵のことではないと思います。行動力とそれに基づく強い理念がないとできることではないと思います。小規模で小グループ。そこで行き届いたケアをして生活の場をつくる。家族やお年寄りによっては色々なニーズがあり、それに柔軟に対応できるというのは本当に重要な事だと思います。

現場の意見や声を聞き、その反省を生かしてより良いケアをする。人の命や人の生活を大切にするケアをする。これらは当たり前の事ですが、常にその言葉を理解し考えながら介護をするというのは難しく、いつも心の中でこれでいいのだろうか。もっとできることがあるのではないかと自問自答の繰り返しです。

本の中の言葉にあるように、適切なケアを行うためにお年寄りの状態をその時その時でしっかりアセスメントできる力、臨機応変に対応できる力を養っていきたいです。そしてほかの職員を見て、良い対応良い声掛けをしていたら自分も真似て積極的に取り入れていきたいと思っています。

小規模多機能の、地域での役割を実践していることぶき福祉会で働くことができたのは自分にとって意味があり、益々学ばなければと気が引き締まりました。

白築美津子